

2012年に当研究所が実施した「幼児期から小学1年生の家庭教育調査」(*)では、人の話を最後まで聞く、相手の意見を聞く、物事に挑戦する、自分の気持ちを調整するなどの力がその後の「学びに向かう力」の土台になることが明らかになりました。「学びに向かう力」を、幼児期にどう育むかを考えます。

*調査結果はHPをご覧ください。▶▶▶ <http://berd.benesse.jp/>

第3回 「関わりの中で気持ちを調整する力」を育む

イラストで見ると「関わりの中で気持ちを調整する力」が育まれた状態とは？

Aちゃん
5歳・冬～春

5歳児クラスでは、2月の生活発表会で7～8人のグループごとに劇を発表することになりました。Aちゃんのグループでは話し合いの結果、いくつかの提案があり、「ブレーメンの音楽隊」に決まりました。しかし、Aちゃんは「宇宙のお話がいい!」と主張します。最近、お母さん

に読んでもらった宇宙のお話が入ったようなのです。しかし、グループのほかの子たちはそのお話を知らないの、Aちゃんの希望は通りません。

Aちゃん以外の子どもたちは、「ブレーメンの音楽隊」で気持ちが固まってきました。しかしAちゃんは「宇宙のお話がいい!」と言い張ります。

担任はAちゃんに「そのお話、劇以外で楽しくできないかな?例えば紙芝居でみんなに見てもらおうとか…」と提案します。Aちゃんは黙って下を向いています。ほかのメンバーは心配そうにAちゃんを見ている。



しばらく考えていたAちゃんは「紙芝居にする。だから劇はブレーメンの音楽隊でいいよ」と言いました。ほかのメンバーは「やったー! Aちゃんありがとう。ぼくたちも手伝うからね」と口々に言い、劇の練習の合間に紙芝居作りもしています。

自分の気持ちをみんなに認めてもらったAちゃんは、友だちとストーリーを考えながら楽しい紙芝居を作りました。数日後、帰りの会のときにみんなに見てもらい、満足しました。そして「ブレーメンの音楽隊」の劇にも自分から積極的に参加しました。



Aちゃん

ブレーメンでいいって言ったら、みんながありがとうって言ってくれた! どちらもみんなで作って楽しかったよ!

Aちゃんがブレーメンでいいよって言ってくれたから、劇ができたよ。よかったー!



グループのメンバー

どんな力が



周囲から認められる安心感を土台に折り合いをつけていく力

他者との関わりの中で気持ちを調整する力は、5歳頃から身につけていく力であり、集団生活においてとても重要な力です。ただ、この力はあくまで「気持ちを調整する」ものであり、「抑制する」ものではありません。子どもは周囲から自分を認めてもらう安心感がまず土台となり、そのうえで自分の気持ちを切り替えていくことができます。受け入れられている安心感がなければ、状況に応じて気持ちを切り替えるなどの自覚的な行動は難しいでしょう。

そもそも、子どものこだわり、自己主張は当事者としての自覚からくる重要なものです。実際、子どもが互いに自己主張できるクラスでは、うまく折り合いがつけば、意欲的に物事に取り組むようです。十分に自己主張し、受け入れられれば、その後の自分の行動にも責任をもてますが、押しつけられるだけでは行動は意欲的なものにはなりませんし、やり遂げることもできません。つまり、がまんをしいられるばかりでは、自己調整はできないのです。

●「関わりの中で気持ちを調整する力」が育つために必要な経験

- 0～2歳：喃語や一語文で表したことに同じ音で応じてくれる大人が必要。言ったことが受け入れられる安心感、繰り返される音の心地よさを感じる。
- 3歳：同じ年齢の子がそばにいる楽しさ、「お友だち」という言葉の意味がわかるようになる。また、周囲の子どもと衝突したときのいやな思いを癒してくれる保育者の存在で安心し、信頼するようになる。自分かけられる言葉の温かさを感じる。
- 4歳：2～3人の友だちと同じイメージで遊ぶおもしろさがわかり、自分の気持ちや考えが受け入れられるうれしさを体験する。「仲間」という言葉の響きや気持ちのつながりの心地よさの一方で、思い通りにならないもどかしさも体験する。
- 5歳：集団の中で役に立つ実感、同じ目的に向かう一体感を味わう。譲る・がまんする必要性とそれによる喜びや達成感、逆にうまくいかなかったときの残念さなどを共有する。この両面の感情体験を共有することで友だち関係が深まる。

どのように育むか



子どものもっているイメージをできる限り尊重する

自分の主張や希望が受け入れられている安心感を与えるためには、子どもが抱いていたイメージをできるだけ尊重することが大切です。「みんながこう言っているから、その通りにしよう」と説得しても本人は納得しませんし、また、子どもたちに「みんなで話し合って」と調整まで任せるのはこの年齢では無理でしょう。そこで、それぞれの子どもが尊重される保育者のアイディアが必要になります。左の例では、Aちゃんの希望通りの劇はできなかったけれど、宇宙のお話は紙芝居で実現でき、さらに友だちの協力も得られたことで納得し、折り合いが

つきました。やりたいことがある程度実現できる見通しが立ったことで、自分が譲る必要性も感じ、気持ちよくAちゃんは劇に参加できたのです。大人はつい「いつまでも主張していても状況は変わらない」と、言葉による説明で納得させようとしていますが、この年齢ではまず「自分の考えも保障されている」という安心感が必要であることを保育者は忘れないようにしたいものです。その安心感の上に、徐々に「このままではみんなが困る」などの状況判断や、「自己主張ばかりだと恥ずかしい」「譲ると気持ちいい」という感情が生まれてくるのですから。

